

2008年 アメリカ ロードアイランド国際映画祭ファーストブレイス賞
2008年 エストニア ターリン ブラックナイツ映画祭 公式上映
2009年 オランダ ロッテルダム国際映画祭 公式上映
2009年 アメリカ ロサンゼルス ジャパン映画祭 ベストフィーチャー賞
2009年 アメリカ ロサンゼルス アジアパシフィック映画祭 公式上映
2009年 イタリア ミラノ映画祭 ベストフィーチャーフィルム賞
2009年 アジアフォーカス福岡国際映画祭 公式上映
2009年 カナダ モントリオールヌーヴォー映画祭 公式上映
2009年 フランス リヨンアジア映画祭 ジュニアジェーリー賞
2009年 イタリア ラクイラ国際映画祭 ベストフィーチャー賞 受賞



京都大学 KYOTO UNIVERSITY

こころの未来研究センター

ひきこもりを生む恥の文化

<http://tobiranomuko.com>

扉のむこう

Left Handed

(with English Subtitles)

現在日本に70万人と言われる若い世代の「ひきこもり」。
外国人の映画監督がその真髄に迫る、緊迫した映像描写。
元ひきこもりの少年が演じるノンフィクション風のストーリー。
数々の賞を受けたこの作品の上映と、監督、ひきこもり研究者（心理学・社会学）による
パネルディスカッションを通して、ひきこもりについて考える会を開催したいと思います。
これまでひきこもりに関心がなかった人も、スラッシュ監督の作品に興味がある人も、
ふるってご参加ください。

京都大学こころの未来研究センター主催

「扉の向こう」上映会 ～「ひきこもり」に迫る～

日時：2011年5月31日（火） 14:30開演（受付開始14:00）

会場：稲盛財団記念館3階大会議室

14:30～ 映画上映

17:00～ パネルディスカッション

パネリスト：

ローレンス・スラッシュ（本編映画監督）

ビナイ・ノラクンキット（ミネソタ州立大学・文化心理学）

トゥッカ・トイボネン（オックスフォード大学・社会学）

境 泉洋（徳島大学・臨床心理学）

内田 由紀子（京都大学こころの未来研究センター・文化心理学）

参加対象者：研究者・大学院生・学部生

申し込み：京都大学こころの未来研究センター

リエゾンオフィス（kokoro-liaison@educ.kyoto-u.ac.jp）まで
所属、氏名、学年等をお書きの上、「扉の向こう上映会参加希望」と
明記の上お申し込みください。先着60名様を対象としております。



扉のむこう

Left Handed (with English Subtitles)

<http://tobiranomuko.com>

『扉のむこう』は、東京のとある郊外を舞台にした物語。不満を抱えた十代の少年、宏が主人公である。宏は学校で問題を抱え、ある日突然自分の部屋に閉じこもってしまう。その後2年もの間、部屋から出る事を拒否し、誰も中に入れようとしめない。宏の両親はそのことを恥じ、友人や親戚にも事実を隠そうとする。当然のことながら、家庭は次第に崩壊してゆく。この物語は、日本独特の社会現象といえる「ひきこもり」をテーマにした作品であるが、この「ひきこもり」と呼ばれる日本の若者の数は、百万人にもものぼると言われている。『扉のむこう』は英国人監督ローレンス・スラッシュの長編デビュー作であり、SIZE のエグゼクティブプロデューサー齊木貴郎との共同製作である。アメリカ人アーティスト、PAN AMERICAN が音楽を提供。キャストの殆どに役者ではない一般人が起用され、力のこもった物語構成でありながらも、ドキュメンタリーの要素が織り込まれている。古典的イタリアのネオリアリズムの影響を受けたスタイルである。

「ひきこもり」は日本において、大きな問題となっている。社会から離脱する「ひきこもり」は無秩序状態とされ、近年この状態に陥る若者が少なくない。社会との関わりを遮断した若者は、多くの場合、自らの部屋に閉じこもり、外部との一切の接触を拒む。昼夜が逆転し、昼間は眠り、夕方になると起きだし、夜通しテレビを見たりビデオゲームをする生活を送る。コンピューターや携帯電話を所持するものもいるが、多くは友達も殆どいない。この鬱状態が数ヶ月、極度の場合は何年も続く。「ひきこもり」は郊外、都会を問わず見られ、その4分の3は男性、それも長男であることが多いと言われる。



友達はいない

『扉のむこう』は、「もし・・・であったら？」という1つの大胆な前提のもとに描かれます。「もし子供が自主的に社会から逃避してひきこもってしまったら」という前提があり、映画の中でその答えが明らかになっていきます。この映画は壊れていく家族のドキュメントです。

物語は、主人公である宏がひきこもるまでを描いたシーンの連続で始まります。彼が部屋にひきこもってからは、彼の姿を見ることはなく、彼の家族、主に母親の淑子に焦点を当てます。手に負えない息子の行動を待て余し、長い間ひきこもる息子の言いなりにならざるを得ず、息子の為に食事を用意したり要求をかなえ続け、近所の人や友達の前では平静を装い続けます。宏の部屋の中の描写は殆どなく、中と外を隔てるバリアといえる扉の外にいる淑子の立場で語られます。長男の宏と淑子はお互いに依存関係にあり、それは日本の息子と母親の間にはよく見られる傾向です。父親はいつも仕事で家には殆ど居らず、淑子と宏はますます互いに依存関係に陥ります。淑子は宏が生きていく限りずっと、そのように面倒を見続けるかのように感じられるほどです。

大きな規模で見ると、宏のひきこもり状態は、近年の日本社会の大きな変化によって生まれた新たな人生のかたちとして受け取る事ができるのではないかと思います。監督 ローレンス・スラッシュ



ただゲームをするだけ

監督 ローレンス・スラッシュ LAURENCE THRUSH

ロンドン出身のイギリス人ディレクター。現在はロサンゼルス在住。イギリス、キャットフォードにあるセント・ダンスタン・カレッジを16歳で卒業後まもなくグロウス・フィルムを設立し、ミュージックビデオの監督及びプロデュースを手がけ始める。

2000年、キューバの闘争をテーマにした初のドキュメンタリー、“FIDEL'S FIGHT”を監督プロデュース。この作品は、カーロヴィー・ベアリー国際映画祭、ダブルテイク・ドキュメンタリー映画祭でノミネートされ、2001年のニューヨーク・インディペンデント映画祭では最優秀撮影賞を受賞。

2002年、メキシコの違法墮胎をテーマにしたThe Pro Choice Education Projectの公共広告コマーシャルシリーズを手がける。このシリーズ広告が注目を浴び、続いてThe National Coalition to Abolish The Death Penalty (全米死刑廃止連盟)、Physicians for Social Responsibility (拳銃による暴力を反対するグループ)、Domestic Violence Awareness Month (家庭内暴力意識月間)、Cures Now (ジェリー・ザッカー率いる幹細胞主義を主張するグループ)の公共広告コマーシャルの脚本・演出・プロデュースを手がけることとなる。

2003年、クリオ広告賞とカンヌ・フィルム・フェスティバルにて、ベスト・ヤング・ディレクター賞にノミネートされる。2004年には、ヤングガン広告賞とファースト・ボードで再び注目を浴びる。また、この年、ロンドンの紳士服テイラーのティモシー・エヴェレストとマーク・パウエルとの劇場用コマーシャルも手がけ、ティモシー・エヴェレストの作品は、2004年のロンドン国際広告賞のブロードキャスト部門の最優秀新人監督賞に選ばれる。

同年、ONDCP (Office of National Drug Control Policy- 米国麻薬取締庁)、そしてミラービール協賛のESPNのブランド・キャンペーンも手がける。後者はCreativity誌が発表した2004年度トップ・ブロードキャスト・キャンペーンの一つに選ばれ、クリオ賞、ニューヨーク・アートディレクターズ・フェスティバルを含む世界的な舞台で評判を得る作品となり、カンヌではブロンズ賞を受賞する。

2010年には老人の孤独死をテーマに、カリフォルニアで“Pursuit of Loneliness” (孤独の追跡) を撮影し、現在編集中。2011年1月には、2010年の代理母出産ビジネスの取材の続きで、インドに出掛けている。

作品歴:

“FIDEL'S FIGHT” (2001) ドキュメンタリー 62分
(ニューヨーク・インディペンデント映画祭、最優秀撮影賞受賞作品)
『扉のむこう』 (2008) 映画 108分

問い合わせ先

京都大学こころの未来研究センター・リエゾンオフィス
Tel: 075-753-9887 E-mail: kokoro-liaison@educ.kyoto-u.ac.jp
URL: <http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/index.html>

会場: 京都大学 稲盛財団記念館 3階 大会議室

京都市左京区吉田下阿達町40(吉田キャンパス川端近衛南東角)
市バス: 205系統、4系統で『荒神口』下車徒歩2分
京阪電鉄: 『神宮丸太町』より川端通り北へ徒歩5分
※駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。

